

## ●はじめに

私をはじめ「総合診療（内）科」（以下、総診）にかかわったのは、今から20年近く前の研修医時代になります。臨床研修がまだ必修化されていなかった当時、卒業後母校である聖マリアンナ医科大学の小児科に入局した私は、内科ローテーション研修に、できたばかりの総診を選択したのです。深い理由はなく、学生時代にお世話になった剣道部顧問の亀谷 学 先生（現：日本プライマリ・ケア連合学会監事）が、大学病院総診の初代部長に就任されていたため、「まあ、亀さんの下なら悪いようにはされないかな…」程度の考えであったように記憶しています。当時の同病院総診には生坂政臣 主任医長（現：千葉大学教授）がおられ、その外来診療を見学させていただき、不定愁訴や認知症と考えられていた患者さんの診断が次々と確定していく様子を見て、「総診（生坂先生は家庭医と名乗っておられました）というのは凄いところだな…」と強く印象に残ったものです。

私はその後大学院へ進み、大学院修了後は国立精神・神経センター武蔵病院小児神経科で研修を受けました。そして、（現勤務地でもある）新設の川崎市立多摩病院へ赴任することになります。偶然にも初代院長は亀谷 学 先生でした。亀谷院長は「小児救急診療は小児科と総診が協力して行う！」という方針を掲げられていました。しかし、この方針については小児科内でも反対の声が強かったのが実際のところでした。私は“総診医＝生坂先生”のイメージでしたから、「大丈夫ですよ。きっとわれわれより評判よいと思いますよ！」などと周囲に話していました。そのときに総診より小児救急診療のお手伝いをいただいたのが、大橋博樹 先生・喜瀬守人 先生・麦谷 歩 先生の3名です。彼らは、私の予想が間違っていないことを短期間で証明してくれました。

その後も多摩病院において小児科と総診の協力関係は形を変えながらも継続し、小児科で多くの総診医を指導しながら、小児科医も総診医から多くのものを

学ぶことができたと思っています。

総診の医師は真面目な人が多く、とても真摯に患者さんと向き合っている印象です。一方で真面目ゆえに、こどもの診療に際して保護者への説明も生真面目過ぎる印象を従来からもっていました。「もう少し間合いの取り方が上手になると、もっともつよい外来診療になるのに！」という気持ちです。

そうこうしているうちに、公私ともに親しくしていただいている大橋博樹先生から総診医向けの講演や講義などの依頼をいただくようになり、それがきっかけで「Gノート」誌上で連載をもたせていただくようになりました。本書はその連載に加筆修正を行い単行本化したものです。

私の小児科医歴のなかで、「上手く説明できなかった…」「質問に適切な回答ができなかった…」と感じていた事柄について、「このように説明すると理解してもらえるみたいだな！」と気づいてきた項目についてまとめています。休憩時間に気軽に読めるよう会話形式としました。こどもの診療に携わる総診の先生だけでなく、外来診療に不慣れな小児科医にもきつと役立つと思っています。ぜひ気楽に読み進めてください。

本書の発行には本当に多くの方にご協力いただきました。連載企画から編集までご協力いただいた大橋博樹先生、討論時にさまざまな意見をいただいた小島隆浩先生・町野亜古先生・太田浩先生、編集部の方の森悠美さまをはじめとする羊土社の皆さま、そのほか本書にかかわってくださった多くの方に心より御礼を申し上げます。

2018年5月

川崎市立多摩病院 小児科

宮本雄策